

# 京鹿子



平成二十七年六月一日発行  
通巻〇九〇号 毎月一回、日発行

6月号

豊田都峰  
叡林集 その六

三月は父郷の丘の風が書く  
野の霞その彼方なる父郷かな  
うぶすなの灯を芯として森ふかむ  
参道の人中にこそ春めける  
野の道は風三月のひと筆描き  
全山は芽吹ける音のまんだら図



皇子ねむる山むらさきに春夕焼  
若草野午後の日射しに膝を抱く  
城址を頂として夕ざくら  
風化仏二体のあひの母子草  
あだし野のしるべ傾ぎて母子草  
林出て里へひとすぢ日永なる  
橋越えてまた葉桜の堤なる  
風さそふ藤たれこめしころなれば



—近詠—

鈴鹿 仁

## 初幟

みどり山翳せば神の声がする

正一山へ老鶯渡りけり

〔正一位は稲荷  
大社の別称〕

初幟いのちをつなぐ一軒家

—追懐—（その十）

葉ざくらや素通りの国讃岐めん

〔平成四年作〕  
〔道後吟旅〕

豊の国は仏の里よ金鳳花伊

〔平成四年作〕  
〔道後吟旅〕



— 近 詠 —

和田 照海

生簀籠

伊 予 の 嶺 に 屯 す 雲 や 海 鼠 突  
生 簀 籠 た つ ぷ り 濡 れ て 石 蓴 波  
一 湾 の 海 を な ら し て 春 の 鳶  
磯 菜 摘 む 門 浪 の う ね り 遣 り 過 し  
小 波 の あ や な す 光 蘆 の 角

## 秀華採集

流し雛青きしじまのひとところ

片山 熙子

空も海も青き中を流れゆく雛。その思いを汲み取るごとくに「青きしじま」とつぶやき、仰向くごとき今の姿を推し量るように「ひとところ」とまわりを振り返る。いずれにせよ、その思い入れを評価したい。

城壁に世代を継ぎし名草の芽

塩 見 かず子

春愁や読めて書けない文字のごと

岡 本 瑛子

前句の受け継いでゆくことの具体的な描きぶり、後句の形のあるようなないよ  
うなもの描きぶりを、ともに評価したい。



# 神麓集

散るさくら

藤岡紫水

水皺に朝の陽あつめ春の川  
行くほどに山みな笑ふ旅日和  
山笑ふくすぐるほどの風つれて  
諸子焼き少年の日々焙り出す  
宵と夜の淡きはざまに散るさくら

花に撮る

松本鷹根

高札址橋の袂に陽炎へり  
沖かすみ敢て記憶は辿らざり  
谿残花梢を競ふ松  
一陣の飛花見送れば遠比叡  
花に撮る百七歳を偲びつつ

松田都青

停学に慣れし子と食む牡丹鍋  
風花や湯が滾ぎりある夜の無人  
風邪の親風邪の子供に付き添へる  
閑職は定時帰宅よ日脚伸び  
予後問はれ雪消ゆ頃と答へけり

春ごろも

北川孝子

ひとりにも歲月巡る春ごろも  
ゆらゆらと晩年の歩や薄紅梅  
生きるてふ春待つ心ちやわん坂  
追憶の水よりあわき磯遊び  
音消してふくらむ山河春そこに

旅土産

丸井巴水

青年に無視されいまだ眠き蛇  
蝌蚪の群れ満霊にして里は餓  
耳朶響く受話器の向かう雛の宴  
丸め持つ赴任の辞令蝌蚪に脚  
大蝌蚪の尾のゆらめきが土産

梅の屋

塩貝朱千

バツカスは神話に在し梅の東風  
梅の屋四隅の丸き角砂糖  
水温む大蛇の酔ひしにこり酒  
かほ伏せて落ちし椿を起こし  
強東風や神の大樹の揺れどほし



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

流し雛青きしじまのひとところ

京都 片山 熙子

落椿ならぶ地蔵の苔衣

さざ波の広さを変へる春の風

行く雁や夕暮れて風荒び来ぬ

咲き過ぎし紅梅空を汚すかに

雨水日の誕生の娘にカード書く

アリゾナ 伊吹 之博

ほんとうはみんな淋しい春帽子

城壁に世代を継ぎし名草の芽

塩見かず子

卒業の文字が躍る娘のメール  
黄砂降る比叡も愛宕もレトロ口調

退屈てふ自由もありし椿落つ

新記録達成の日や春の空

珈琲の香定位置にゐる桜草

雪の朝足跡くつきりつづく庭

オハイオ 水谷 直子

シヨパンかな茶房に氷のとける音

寒の空斜めに白き線数多

春愁や読めて書けない文字のごと

岡本 瑛子

春淡し時折みゆる空の青

銀嶺を借景として花菜畑

寒明や未だまだ遠く野辺白し



冴返る指先のみの会話かな

札幌 野村 鞆枝

二月果つ曖昧模糊の神の御代

追ひこしていく若人の群息白し

北の空変体仮名の鳥帰る

冬麗二つ続けて青信号

酒田 藤波 松山

寒晴や下校の赤きランドセル

冬の雷又も腰痛呼び起し

東窓水耕栽培ヒヤシンス

戦争を知らぬ議員や春寒し

園児等の揃ひの帽子枯木立

冬の園和太鼓響く街頭芸

雪晴の湖上遥かに伊吹山

雪原へともあれ父子の蹠二列

梟鳴く森はみどりの煙立つ

雪原の果は見えざり鶴の舞

たらちねの母の梳櫛春ならひ

春の泥とんで少女の意趣がへし

やはらかな鋭角おぼろ夜の豆腐

ガタつきに紙を挟んで春ですよ

遠くへは行かぬ約束野水仙

味噌焼くる匂ひ含みし飛驒の雪

山々の富士を捧げし深雪晴れ

布川 孝子

直江 裕子

千葉 伊藤 希眸

さいたま 神田 惣介

寒月や駅は一日の灯を落とす

寒たまご健康寿命てふはなし

雲が行き鳥の影ゆき葱坊主

綾とりの二段梯の遅日かな

指先に紙の厚みや春ともし

少年の寝息のリズム弥生来る

日向より梅のほころぶ碧き空

梅巡り語りかけたき人思ふ

雪降りて急かるる心消ゆる朝

露の墓猫の高声広がりにて

梢灰の崩れるやうに春落暉

夫へ春雲のかげらの流れゆく

梅一ひらひとごとのやう四十年

春三日月鏡の中のどこに置く

海冴ゆる雄々しく根付くマンダローブ

海碧く名に負ふ榕樹浅き春

縮台に母のまなざし針供養

小稲荷へならひの供物午祭

登校の顔かほかほにある余寒

薄氷割れど童心返らざる

目薬のじゅわつと沁みる寒の明け

城壁に水の影揺れ春動く

高野 春子

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船橋 元橋 孝之

金子 正道

内裏難だけを飾るや娘の帰る

東京 野中 圭子

待機する児童老人月おぼろ

門前のチューリップ鉢陽を集む

春の月酒一合の余生かな

春寒や医者よ薬よ神御座す

葉かくれの蕾ひきだすバレンタイン

眉毛伸び励まされをる去年今年

磨て鉢に金の成る木や木の芽雨

古民家をめぐる小径に春の色

丹羽 武正

割れかかる板碑の庭に露の臺

木漏れ日に飛石揺れる梅の園

夜具の香は春日たつぷり壁は黄に

誰を待ち何を思ふや春の鴨

失せものを夕餉までには日脚伸び

平信と記せる便り雨水かな

春立つや厚化粧して万歩計

紙漉くや梨園に昏き翳よぎる

岸上 道也

余寒なほ郵便受けに鍵の穴

彼岸会や声高らかに居士大姉

歩行者天国泥葱背負つて歩きけり

西から雨廃校跡の花薺

福島 照子

さくら貝視野のかぎりの海風げり

稜線に陽を置きながら鳥帰る

流木に故郷問はな野水仙

べうべうと空ゆりかごの芽吹かな

高島正比古

菜の花や百歩足らずの距離に母

雪解けやフラスコの湯の沸いてをり

花の山現在位置がわからない

路の臺馬頭に傾ぐ仏かな

初蝶の震へたふとき詩片かな

中島悠美子

暖かやこんなところにまた黒子

手枕のゴリラ建国記念の日

一人旅聴雪の夜は更けゆきて

中西 明子

泣き場所は知られたくない葱の花

足湯して人とつながる深梅路

春月や腕は潮のにほひして

雨音も幽かになりてガラス雛

河島 坦

日溜りは早や目ざめをり犬ふぐり

啓蟄やグリーンのスカーフひるがへし

人は人已は己れ犬ふぐり

少年の声はプリズム春兆す

中村 三郎

立春やぽんと背中を押されたる

ゴミ出しの役は習ひに木芽風

身を反らす供物の鯛を一の午